

＜北海道熊研究会 会報＞ 第68号 2017年 6月 24日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～66号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

北海道野生動物研究所では、2013年以来、東京水産大学出身で、野生動物学者で写真家の稗田一俊氏と共同で、知床ルシャ川・テッパンベツ川両河口域で、熊 U.arctos に関する事象に関し調査研究を行っている。以下に2016年3月に作成した3ヶ年間(2013年、2014年、2015年)の結果を総括した報文を、順次公表しますので、ご覧下さい。今般はその第2報です。

＜第2報＞

＜報告書 知床調査＞

2016年 3月 13日

ルシャ川・テッパンベツ川 両河口域での  
3カ年間(2013年、2014年、2015年)の熊 U.arctos に関する調査報告

調査者及び報告書著者

北海道野生動物研究所

所長 農学博士 獣医学修士 門崎 允昭

研究所 主幹 稗田 一俊

研究所 主幹 PETER NICHOLS

【要旨】

＜4＞ 車両への熊の反応対応

- ① 道路に居る熊は、車両の音を聞いて、音源方向を見、車両が近づいて来ると、路床から出て、10数m～20数m以上離れた位置まで、移動し離れる。
- ② 道路を移動中、自動車が来ると、しばらく道路伝いに走り、脇にそれて、己が安心し得る場所に走り行くか、車が来ると、察知して、路床を離れ、20～30m離れた草地や海岸の玉石の堆積地に移動し、車との遭遇を避ける行動を取る。
- ③ 子熊が8ヶ月令を過ぎると、母熊が子を連れて、我々の停止中の自動車の数mから10m程の近くまで、近づいて来る事があり、これは子熊に、自動車が如何なる物か、見せに来るものと看取された。母熊の子の教育の一環と看取された。稗田はこれに加えて、母熊は自らが認めた知り合いの人に対して、我が子であることを伝え、その人に認めてもらうために近づくことと捉えている。なぜなら、人の近くにいれば他の熊が近づいてこないのを、

人の近くであれば安全・安心して子育てに励めることを学習しているため、あえて、知り合いの人に近づいて、我が子を知ってもらおうとする行動と捉える。または、母熊の知り合いの人への親愛なる挨拶行動と捉えることもできると看取している。

#### <5> 熊同士の対応として、次の知見を得た。

① 6月時点の(4ヶ月令)の子を連れた母子は、他個体との距離間隔を離す。② 9月時点の(7ヶ月令)の子を連れた母子は、他個体との距離が近間になることがある。特に両母子に同年齢の子が居る場合には、子が相手の子に関心を持ち近づく場合があり、最近でその間隔が10mほどになった場合を実見したが、両親は怒らず、しばらくして、互いに子を連れて離れて行った(熊同士、母親同士トラブルを避けているなどの感がした)。

③ 単独個体の大物が、当該地(近辺や一時的に川辺など)に現れても、母子の生活を阻害せずに、単独個体の方から立ち去る場合が多く見られた。④熊同士意志の疏通を図っている。例えば、母熊が子をおいて、単独でその熊に、徐々に数mまで近づき、しばし、単独個体の方を見やり戻って来る。すると、単独個体の熊は、母子の行動を阻害せずに、立ち去るのを、幾度か実見した。互いに意志疏通し合っている事が看取された。

#### <6> 大瀬初三郎氏(1936年生)の熊への対応

氏に聴取した結果、熊に対する対応は次の通りであった。

① 銃殺を1989年に止めて、数年経てから(1995年頃から)、人や車を熊があまり気にせず、番屋付近にまで、熊が普通に出て来るようになった。② そこで、熊が使ってもよい場所と否場所を教える事を試みた。その方法は、出て来ている熊に対し、人が居る場所に近づかない事と道路を人や車が通る場合には、その場から、立ち去る事を、単純な言葉で、大声で熊を叱り、その場から立ち去るようにさせた。その結果、熊ともトラブルも無く、以後全く、熊が居ることに関し、不便は感じていない。③ 番屋に寄り付く熊が居る場合は、一時的に電気柵を張り、トラブルを予防する事にした。番屋の人間にも、外での作業で、熊を怖がる者が居たが、熊が居る状態の経験を踏むと踏むと、恐怖心が解消する。要は、人と熊が使う場所を区別する事、これを、熊に教える事が基本であるとの事で、熊を諭す時の実際は：① 熊が居ても良い場所と否場所を、叱り付けるように(熊より人が強いことを声で強調しながら)、言葉で教える。② 「ここに居たらだめだ、向こうに行け」等、短い言葉で話し聞かせる。時には、大声で諭すか、怒鳴り叱りつける。③ 家に寄って、離れない熊に対し、1m程のロープを、振りかざして脅した事がある。それで、その熊は退散した。以上の様な対応を日常的に行い、今も行っているが、その結果、熊とのトラブルも無く、以後全く、熊が居ることに関し、不便は感じていないと言い、19号番屋では人とヒグマの共存共栄が成り立っている事が看取され、この手法が共存策の決め手であると、我々は確信した。門崎の46年間に亘る熊に関する多様な調査と経験からも、熊は非常に頭脳明晰で、人の言葉も確実に理解し聞き分ける能力を持っていると確信している。例えば、気づかずに近づいて来る熊に対し、「ホイホイ」と言えば、私を迂回して通り過ぎるし、その場に居る熊に対し、門崎は「何しているの。どこから来たの。等いろいろと話し掛けるが、それに対し熊は顔の表情と全身の仕草で答えるし、熊は無用なトラブルを自ら避けようとする意識も強いと門崎は看取している。なお、熊の鮭鱒の補食生態についても、知見を採録した。

#### <課題>

今般得られた知見が、普遍的な事象か稀な事象かの検証と、さらなる知見事象の有無についての調査を、継続して行い、共存策の確かな手法の確立を図りたい。(丁)